
テンプレ異世界物語を神の視点で見てみる。

水上羚（みなかみれい）

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

テンプレ異世界物語を神の視点で見てみる。

【NZコード】

N3036M

【作者名】 水上 紗衣 みなかみ れい

【あらすじ】

ありきたりなテンプレ異世界物語を勇者視点ではなく神々の視点から綴るだけ。何が起こるかも、神も天も（作者も）知りません。いきあたりばつたりな勇者に悪態をついたり、おちょくる神をご覧ください。それではごゆるりとお楽しみください。
ぱちぱち、転生ネタを取り入れようと転生ネタに向けて執筆中。できたらいいなあ

基本的に毎週火曜日更新。タブンネ。

ストーリー性は一ミクロンもありません。あしからず。『』重要。
テストに出ます。

設定集（前書き）

連載が不定期です。

設定集

これは中世の世界をモデルにした物語。テンプレ通りの物語を勇者やその仲間たちの視点ではなく、召喚した神の視点で見てみる一風変わった小説。

中身は要約すると和気藹々と進んで行く勇者一行に悪態をつく創造神に、

神のテンプレルールなどおかまいなしに干渉したりひつかきまわしたりする神たちの観察日記です。

まあ、片手間で読む暇つぶしになります。

以下、設定集

世界について
モデルは中世の世界。

にもかかわらず、中世以降のものやそれ以前の時代の産物が登場したりととにかく力オス。

大陸は一つ。泥だまを落としたような橢円形に近いゆがんだ形の大陸ティエンス。

日本に似ている列島や数え切れないほどの辺境の島々も存在する。

神々について

多神教でそれぞれの神が直轄領で人間が侵入できない場所、「聖域」が多数存在する。

火の神の聖域は火山など・・・・・

種族について

人間に始まり、エルフなど数えればきりがないほどの生き物が生息する。

かなり高い知能を持つ種族もいればそうでない種族もある。

ちなみにロストテクノロジーの類はない。

キャラデータ

創造神

アウグストウス 男 18くらい

黒目黒色でボサボサでフワフワしたくせのあるショートヘアを無造作にそのままにしている。

顔だけ見ると女に間違われるくらいの女顔。おもしろいくらい典型的な日本人の顔をしている。

イケメンでもなく、かといってブサイクでもない平凡な顔とかあまり人に覚えてもらえない。

176cmでちょっと高いところにが届くのがささやかな自慢。オタクでかなりいろいろ詳しい。ちなみに一番すきなのは「なく頃に」シリーズ。

アウグストウスの名前は自分の名前を忘れたから適当にこれでいいやと思い、名乗っている。よじなまことじ
どうでもいいが本名は吉崎結理。

女っぽくて恥ずかしいと思つ思春期真っ盛り。

桜花

14~16歳くらい 女 158cmくらい

22~24歳くらいに変装すると164cmくらい 体重は不明だがかなり軽い

艶やかな藍色の髪の毛をつなじのとじひでオレンジの「ゴムでひとつにまとめている。

紺色のスーツに黒色のマントにシルクハットに銀縁の伊達メガネ。クール系で沈着冷静。何事に関しても傍観者の立場にいる。

普段はポーカーフェイスで他人をからかうのが好き。口調は常に敬語や丁寧語の時や、子供っぽい口調などその時による。

左耳に青い薔薇のピアス。ちなみにサファイア。

桜の紋様の刻まれた銀の懐中時計をいつも持ち歩く。

顔は小さめで、少年のようにも少女のようにも見えるが、やや高めの声で女と判別できる。

基本的には、きまぐれ。まるですべてを知っているかのように振る舞い、時には大人な女性、

ある時は少年のように、あるときは深窓の姫のように振る舞い、その場の雰囲気や話す人によって態度などをころころ変えて人をからかう。

胸はないが、詰め物をしたり、男装をしたりとそのときの気分により服装も変わる。

メガネは銀縁だつたり、ふちなしだつたり、似通ったタイプの伊達メガネを複数所持している。

気に入つたか、心を許している人のみ名前で呼ぶ。本人も気がついていない癖。

真夜
マヤ

153cm、かなり軽い。

どこかにあり、どこにもない館の主。赤いリボンをカチューシャのようにつけて、

装飾の類の一切ない黒いワンピースに白いハイソックスに小さな赤い靴。

首には頭のリボンと同じ材質の赤いリボンをチョーカーのようにつけている。

赤い車椅子に座り、生氣のない眼で物事を見つめて淡々と生きている。

口数もなく、必要最低限の言葉のみで考へていることは不明。――

人称は私、
二人称はあなた。

設定集（後書き）

これからどんどん増えて行く予定です。

2011 1 23 追加。

はじまりはいつも唐突に（前書き）

これから小説には何らかのネタがはいります。皆さんには見つけられるでしょうか。

はじまつはいつも唐突に

何もない漆黒の空間で佇む青年が一人。

白いローブを身にまとい、ただ一点を凝視する。

彼が行つてゐる行為は誰かをもしくは、何かを待つといつ行為だった。

「待たせてすまんの」

青年の背後から160cmほど^{おきな}の豊かな白ひげを蓄えた翁が現れる。

「なあ、じつちや。オレはどうぐらい待つたんだ?」^ここには時間の概念がないからわからねえ

べつに動じた風もなくふりかえる青年。

この老獏な翁に親しみを感じてゐるよつだ。

「それほど待つてはおらんよ。10分くらいかの?」

「そうか」

「実はの、そつちで転生してほしい人間がいるんじやよ。一人ほどな。男二人じや」

「どんなやつだ?」

「おまえさんの人間時代の知り合いじゃ。それとも悪友と言つたほうが正しいかのう」

「…………つてことはマイシラカよ。よつとよつて史上最低最悪のやつらを…………」

青年は思いつきり顔をしかめて悪態をつくる。

その後もできるかぎりの抵抗を試みるも虚しく、青年の負けとなつた。

「つたくしゃーねーな。転生させたあとは何やつてもいいんだな?」

「かまわんよ。あと事故死に見せかけて殺してはいけんがの」

「ねつ、他人の心よみやがつて」

「ふおつふおつふお。それではの。後で送り込むからようじくたのむだ」

「あいあい。やつやーいんだろ」

なげやりになる青年をよそに翁は別れを告げるとすぐさま隣の棟のようになってしまった。

せじまつはいつも唐突に（後書き）

これから、「テンプレ異世界物語を神の視点で見てみる。」、略してテンプレをよろしくお願ひします。
それでは、またどこかでお会いしましよう。
けして作者名をググったりしないでください。

IJの世界の基礎理論と内包事情（前書き）

サブタイに意味はありません。基本的に。あしからず。

IJの世界の基礎理論と内包事情

神や天使の住まつ天界の中心、八角形の三重の城壁に囲まれた城、
八角城。はっかくじょう

一番外側の区画と城壁は中華風で下級の天使が住む。

外から二番目の区画と城壁は洋風で上級の天使が住む。

中心の区画と城壁は和風で神々の居住区。

その神の居住区の端、小さな庭園の東屋で机に突っ伏して寝る青年
が一人。

先刻、老猾で愉快な翁に頼みごとを任せられてうつになり現実逃避の
うちに寝てしまつたようだ。

彼の名はアウグストウス。この世界の創造神。

典型的な日本人の容姿と氣質を親から受け継いでいるので異世界で
は珍しがられる。

「おい起きろ！ アウアウ！ 觀劇の魔女って呼ぶぞ！」

「うめええええ！ 著作権に問題がああ～っ！」

水色の長髪をポニーテールにした長身の褐色の肌の青年がアウグスト
ウスを振り動かし、叫び、起こす。

跳ね起きたアウグストウスはかなり現実的な指摘をしてあわてる。

アウグストウスはぶつぶつぶやいてから空間にゆがみを生じさせてゆがみの向こうへ消えた。

優しいのだらつか、酷くて外道なのだらつか。（前書き）

さて、問題です。このお話にネタは存在するでしょうか？
わかつたらこれだとと思ひ部分を「ペペして、「～～」のじいろがネ
タですか？

みたいな形で回答してみてください。

先着一命の方に小説を書かれている場合はお邪魔するか、
リクエストでひとつだけいつかは不明だけど短編を書くかもしれません。
せん。

なおこのネタ探しは完結するまで続きます。

優しいのだらつか、酷くて外道なのだらつか。

漆黒の空間で一人の少年が騒いでいるのが見えてアウグストウスは青筋をたてた。

「あんにゃー昔はこつとも迷惑なことしゃがつてー復讐の時間だ」

遙か上空で呪詛にも似た言葉をつぶやくと、空間の切れ目から一振りのロングソードを空間間に存在する収納スペースから取り出した。

「うおおおおおー見せてやるよ黄金の夢ひてやつをよおおおー約束された勝利！」

無駄に叫びで怒りを表してみたりした。

全力で振り下ろすと衝撃波が光を伴い少年たちの間に炸裂する。

感情を吐露してすつきりしたところド・オ・ハ・ナ・シタイムに強行突入した。

「よつ、ひせじぶりじゃねえか？ド畜生で外道野郎」

いつのまにやら自動販売機を左手に担ぎ、

右手に道路標識を持つていて怒りのボルテージマックスのアウグストウスに

少年らはスライディング土下座していた。

「あの時はすんませんしたあーー。」

「「」めんどりさんだらケーサツはいりねえんだよー・ああん?わかるよな?」

ガクブル状態で怯える一人に自販機と標識を捨てて殴りかかった。

————以下、音量のみでお楽しみください

バキッグシャツ。

「ギヤアアアアー!」

「ゴメンナサイ、ゴメンナサイ、ゴメンナサイ……以下、H
ンドレス」

ふおんぐしゃ。

「あべしつ」

「あははははははー・楽しいねー・楽しいねー。」

「こやだあああああー。」

一時間後、満足そうな笑みを浮かべて簾巻きにした少年らに理不尽

な言葉をかけた。

「お前らには並以上、伝説級以下の魔力と剣の才能をやる。剣術とか魔法は自力で覚える」

「嘘だー」いつときは最強にしてもうえるはずなのに

「じゃーなあ」

指をパチンと鳴らすと黒い穴が出現に落ちていった。

「さて、帰つて風呂でもはいるか

数瞬後、だれもいなくなつた。

優しいのだからか、酷くて外道なのだから。（後書き）

ちなみにネタは四つで完答でお願いします。
ひとつでも間違っていると意味はありません。

それはそれでいいと思うよ。たぶん。（前書き）

評価してくださったかた、お気に入り登録をしてくださったかた、
ありがとうございます。これからも精進いたします。

それはそれでいいと呟つよ。たぶん。

神々や天使の住む天界の八角形の城の最深部に存在する創造神ア
ウグストゥスの私室、

部屋の創造主のみが入れる部屋に天使でも神でもないひとがひとり。
まつすぐでつややかな長い藍色の髪の毛。色白で小顔の中世的な顔
つき。

ほつそりとした体つきにかすかな胸のふくらみから女性と断定でき
る。

見た目から推し量った年齢は十代半ばから後半。

黒いノートパソコン、机、白いベッド、木目の美しい本棚程度しか
ない畳のシンプルな部屋。

無印良品あたりに売つて、いそなべッドでその少女は寝ていた。

さりげなくテーブルにふちのないメガネが置かれていた。

そつと音もなく、部屋の主が現れて少女に近寄り優しく唇にキスを
おとした。

慈しむ様な、愛おしい者を見る目で見つめる。

長い指とおつのいに髪の毛をもてあそんだり、髪の毛にキスしてみ
たり。

その後すぐ恥ずかしいことをしてもだえる光景は第三者が存在すれば甘酸っぱい青春時代の恋で、

若気の至りと捉えられるだらう。

しばりくは日覚めるのを待っていたが、いつの間にか寝入ってしまった。

優しい風が部屋を通り抜けた。

青春?なにそれおいしいの?あと、リア充は全世界から滅べばいいの。

黄昏たそがれが終わりを告げて夜の帳が降り始めるころに、寝入った一人が起きた。

某ホラー映画の着信音がちやぶ台の上の黒いケータイからして、寝ぼけながら部屋の主の黒髪の青年が

ケータイを掴み取り電話に出る。

「もしもし」

「もしもし。青龍せいりゅうだ。メシつけ。何時だと思ってるー。白虎は暴れるし、

玄武はイライラして手がつけられないし、朱雀は料理で暗黒物質作ダークマターるし。

おまえがいないと収集がつかないー早く来いー」

一方的に云えてから切られて、理解に数秒かかった。

「どうしたの?」「ウフ」

藍色の髪の毛の少女がちやぶ台に無造作に置いたふちのないメガネをかけながら問い合わせる。

「桜花、やつと起きたか。かなり寝てたぞ」

「まあね。神経すり減らすような取引とか命のやり取りとかばつかりだし。

「じいじが唯一の安息の場だね」

「はははっ。そう言つてもうりえんとうれしいな。・・・・・で
も、死ぬな。

桜花は独りじゃないから。もう大切な人がいなくなるのはいやだから

「うん。約束するよ。ボクはかなうじいじに無事に帰るよ。

そして笑顔でただいまって言つてアワラをだきしめるから

「こつまでも待ってるから。たまには恋人らしくキスぐらにしてほしいけどな」

「あとで、ね」

「あ、そうだ。食べるか？」

「こりないよ。おなかすいてないし、携帯食料あまつてるし」

「じゃあ、あとで」

そつと引き戸を開めて出て行った後姿を見つめてからまた眠りに落ちていった。

青春? なにそれおいしいの? あと、リア充は全世界から減べばいいのよ。（後書き）

桜花がアウグストウスをアウラと呼ぶ理由は、
あだなのアウアウやアウローラを縮めてアウラにしたから。

アーリンハでかつてござりよ。あと、夏休みの宿題ついでやだよ。

八角城の中心部にある食堂の細長いテーブルに座る五人の男女。

お誕生席にあたる席はいまだ空白で、お誕生席から見て右側に15歳前後の

美しくもかわいらしく輝く長いブロンドのくちなし色のドレスの少女が、

テーブルに突っ伏してねてしまっている。

向かい側の蒼い部分鎧を身につけた褐色の肌に水色のボーテルの青年が、

ロングソードの手入れをしている。

青年の隣には、

白い肌が引き立つ胸元の大きく開いた緋色の着物のセクシーなお姉さまが、

結い上げた真紅に所々オレンジや黄色のメッシュのはいった髪の毛をいじっている。

セクシーなお姉さまの向かいには、

10歳ほどのショートの白い髪の中に黒いメッシュのはいった

生意気盛りの男の子が退屈そうにあくびをしていた。

テーブルの末席、セクシーなお姉さまの隣には、

ショートの黒髪黒目の一、二、三歳ほどのおとなしさそうな少年が静かに何かを待っていた。

アリヤンツでかっここむね。あと、夏休みの宿題つけてやだね。（後書き）

しばらく投稿しなくてごめんなさい。

作者はグロテスクな描写にまじだわりと定評があります。あと妥協しません。ダ

アクセス千人超えていました。ありがとうございます。
ユニークは五人を超えるました。これからもよろしくお願いします。
あと、グロテスクな描写があります。注意してください。

作者はグロテスクな描写には「だわりと定評があります。あと妥協しません。ダ

黄金色の満月が優しく照らす路地裏。

非合法な取引や夜の蝶が艶かしく密引きをするような汚泥やごみが散乱する道に六人の男が、

十七人の人種のさまざまな子供たちが鎖につながれて連行していた。数キロ先には非合法の奴隸の市場があり、男たちは奴隸の卸売商人のようだ。

子供たちの顔はどこまでも暗く、目に光がなかつた。

道の先、男たちの向かう先からかわいらしい透明感のある子供の歌声が聞こえた。

明るく楽しそうに歌う声の主がはつきりと視認できるまで接近すると先頭の男が腰を抜かした。

立ち上がったときの高さが耳を含めないと150cmほど、

耳を含めると160cm強のこげ茶色の野兎が首にシンプルな真鍮製の装飾の懐中時計を

真鍮の細い鎖でネックレスのようにして首にかけて飛び跳ねながら歌っていたのだ。

急にウサギが止まり、^{わら}嗤つた。

そして灰色の石畳を蹴つて姿を消した。

次の瞬間、薄汚い路地裏に赤黒い液体が飛び散った。

先頭の男の胴体のみが崩れ落ちる。

転がり落ちた頭は返り血をべつたり浴びたウサギが右足で軽く踏みつけた。

恐怖がこの場を支配し、誰も動けなくした。

いつの間にかウサギが、160cmほどのふわふわの外ハネのきついこげ茶のショートヘア

の色白のかわいらしい少女に変身していた。

さらにウサギだった少女は人を殺めることに快感をおぼえ、愉悦に顔が歪む。

頭部を蹴り上げて白い華奢な手でつかみ、造作もなく握りつぶした。左手に血塗られた漆黒のナイフを手にまた嗤つた。

白い頭蓋骨、赤い血肉をぶちまけてぐちゃりと粘着質な不快音をたてて少女の右手から滑り落ちる。

脳が石畳に落ちる前にすべての男たちが死んだ。

ある者は原形を保つも死んで、ある者は頭と四肢を切断され、
ある者は体の部位¹⁷とて解体され、ある者は首を捺じ切られ、
あるものは魔法で出現した炎で消し炭になった。

またもや、グロ注意です。（前書き）

更新が滞った理由はポケモンのホワイトを攻略してました。発売日からこの話を投稿した秋分の日の前日まで。たまだいま、四天王戦の手間です。レベルがぜんぜん足りません。ただいまレベルアップ中。

またもや、グロ注意です。

ウサギが何もない空間にぐるりと手を回すと空間に黒い穴を開いた。

その中に時計を大事そうにしまったと、手をパタパタ動かして穴をかき消した。

かき消してから、死体の残骸をかき集めて、ズタズタに引き裂いて血の海を作り上げた。

そして狂気に塗れた嗤わらいをあげる。

そして血の海に盛大にダイブした。

水浴びならぬ血浴びを数分で終わらせて、また空間に穴を開けてきれいな水を取り出す。

水を魔法で操り簡単に水浴びをすませた。

それからウサギは捕らえられていた人間の子供のみを適当な孤児院の中に置き去りにし、

その他の種族の子供のみを転移魔法で自らとともに何処かへと転移した。

なぜか拘束を解かないままで。

いりして、血濡れの惨劇は幕を閉じた。

神話です。この物語の。（前書き）

いつ見ても創世神話なんです

神話です。この物語の。

創造神である主神の男神アウグストゥスがはるか遠方より来ると
き、

世界に形はなく、原初の混沌のみが存在した。

神は原初の混沌をその御手でかき混ぜ、下方に大地を、海を、生
物を、上方に空を、
神々や神のみ使いが住まう世界を創った。

世界と同時に他の神々や世の理を創り、世界各所に力のあふれい
づる世界樹を植えた。

すべてを創り終えると神はしばしのうち始めに人をつくりた地で
すごしたのち、他の神々とともに
神の住まう世界へ旅立った。

エリュシオン創世神話 子供向け現代語訳版

他にも多数知識人向けや見習い神官のための創生史書など多数出版
されている。

多神教なので少々解釈や注釈に違いが見られる。

注意、エリュシオンとは楽園を意味する。この物語の世界の名前。

爪弾いた子守唄が悲しき離別を歌う

八角城はっかくじょうの中心部にある食堂の扉が静かに開かれた。

柔和で慈愛に満ちた瞳のリューション世界の主、創造神アウグストウスが学ラン姿で現れた。

足音をたてず衣擦れの音のみを寄せ、陽だまりのよくな淡いあたたかいほほえみを先に着席

していた者たちにむける。座っていた者たちはそれにつられてほほえむ。

アウグストウスはひまわりリューションのドレスの少女に近づき、優しく声をかけてそっとゆりおこす。

「ほら、起きて……やつぱり起きないね。部屋に運んでおくから先に食べてていいよ」

少女を起さないようお姫様抱っこした世界の主は待っていたことを配慮して来た時と同じように

音も立てずに寄木細工装飾の扉を手を触れずに開き、ゆっくり閉ざした。

彼は、扉が完全に閉まる瞬間移動テレポートーションで少女の部屋の手前へ移動した。

真鍮のドアノブを回し、淡い黄色を基調とした女の子らしきぬいぐ

るみやおもひや や美しい絵本が

適度にちらかつた子供部屋が一人をでむかえた。

部屋と同じ淡い黄色の薄くやわらかいシフォンを幾重にも重ねた天蓋つきのベッドへと

抱えていた少女を寝かせ、かかつた前髪を払い、掛け布団をかけた。
そして、一仕事を終えた彼はつぶやいた。

「おやすみなさい。 良い夢を」

そして音もなく扉が閉まるとともに彼の姿も何処かへと消えた。

爪弾いた子守唄が悲しき離別を歌つ（後書き）

どなたか、コラボしていくださる方を募集しています。

観る者、運ぶ者、歌う者、抗う者、信じる者。

アウグストウスは食堂の前の扉まで魔法で移動してから、手動で扉を開けた。

席にも着かずに、温和な声色と顔でこう告げる。

「やることがあるから、今日は食事はいらぬよ。」「めんね、急に呼び出したりして。

朱雀、ごめんね。いつも無理させてしまって」

緋色の着物の女性を優しくいたわる。

「いえ、そんなことはありません。こつもの」とです

おつとりとした温かみのある声が返ってきた。

「青龍、こつもすまない」

ロングソードの手入れをしていた青い部分鎧をつけた青年から受けない返事が返ってくる。

「こつもの」とだ。気にするな

「玄武、田虎は？」

先ほどまでの生意気盛りの少年が見えないので問うた。

黒髪のおとなしそうな少年が落ち着いた冷静な声で淡々と事務的に答える。

「もう、食事を済ませて持ち場へ

「わかった。ありがとうございます」

そうこうで、まだどこかへ消えた。

観る者、運ぶ者、歌つ者、抗つ者、信じる者。（後書き）

なかなか進みません。自分の腕が悪いからなのか。ほんとうにすみません。

和で今おべて畠中（畠中也）

テストがあるので更新はしばらくお休みです。

君に今あえて問おう

質素な柿渋の扉を開けると、質素な調度品と黒檀の机とイスのみの執務室と

ドアのネームプレートに打刻された部屋にはいった部屋の主、アウグストゥスは黒い革張りのイスに

腰を下ろした。

そして、虚空に指で大きな正方形を描くといつす青い液晶パネルのようないわゆる「魔方陣」が現れる。

まもなく、パネルに映像が映し出される。

パネルを四分割すると、別々の映像が映し出される。

しばらく画面を見つめると紫檀のサイドテーブルの上に置かれた黒電話が鳴る。

すばやく立ち上がり電話を取る。

しばらく話を聞いて、僅かに口角を上げて笑つとふりつと出て行つた。

かすかな足音のみを残して城の出口へと歩いて。

散歩を気取りながら。

君に今あえて聞く（後書き）

親戚の小説とコラボ予定ですが、今のところリストのせいで保留です。

だから、それを選んだ。

天界の、樹海しか存在しない大陸の中心に淡い青白い光を放つ大樹があつた。

赤いリボンをカチューシャのようにつけて、装飾の類の一切ない黒いワンピースに

白いハイソックスに小さな赤い靴、首には頭のリボンと同じ材質の赤いリボンをチョーカー

のようにつけている15～16歳ほどの少女が赤い車椅子に座り、生氣のない眼で樹海の中心の淡い青白い光を放つ大樹を見つめる。

大樹には、二人の女の子と一人の男の子が思い思いの場所で寝ていた。

三人とも10歳くらいで、男の子は大樹の根元で、

女の子一人は大樹のうろの中と大きな枝の上で寝ていた。

少女は数分ほど大樹と子供を見つめてから夜霧に紛れどこかへと消えていった。

少女の行方は誰も知らない。

少女が去つてから、大樹に一つの小さな白い花が咲いた。

リア充なんて・・・リア充なんて・・・（前書き）

ただいま、リア充撲滅キャンペーン中です。うそです
それでは、ストーリーはります。

リア充なんて・・・リア充なんて・・・

体長が1・5㍍ほどもある真鍮の懐中時計を首にかけた大きなノウサギは神々の住まう

世界の淡い光を放つ大樹を中心とした森にたつていた。

連れてきたはずの子供たちほどにもなく、ノウサギはぴょーぴょこと森を跳ね回る。

淡い光を放つ大樹ほどではないが、そこそこ大きな樹の大きなうろに入り込んだ。

そして、そのままノウサギは眠りに落ちていった。

その様子を赤い車椅子に乗った15~16歳ほどの中年の黒いワンピーの瞳に生氣のない少女

が無言で音もなくやつてきては黙つてその行動を見つめではすべるよつに車椅子が動き、

また霧深い森の奥へと消えていった。

しばらくしてから、ノウサギは起き上がりするつとつひから這い出て霧の奥へとまたもや

消えていった。

リア充なんて・・・リア充なんて・・・（後書き）

それでは、よいお年を

リア充爆発！！

次はどこへ行ひか

白い霧が黒い微粒子に変わり、黒い粒子が集まり紅い車椅子の黒いワンピースの少女となつて

この世界「エリュシオン」の主（主）アウグストウスの部屋に現れた。

しばらくシンプルな部屋を見回すと唯一の出入り口のシンプルなドアが開いた。

「アウラ（アウグストウスのあだ名）は今はどつかいつけたよ

紅い車椅子の少女はくるりと振り向くとそこには黒いマントに紺色のスーツで黒いナイフを

左手で弄ぶ藍色の髪の毛の少女桜花がいた。

「…………ひさしひりね」

つぶやくように小さめな声で紅い車椅子の少女が必要最低限の言葉で挨拶した。

「あははっ。いつもと相変わらずで元気そうだね、真夜」

桜花がまるでいたずらに成功した子供のように無邪気に笑いながらかえした。

「 もう？あまりかわらないけれど」

紅い車椅子にのつた真夜は静かに言い放つと桜花はおもむろに飽きてしまい、

興味を無くした子供のよつにすぐに表情を変えてドアを開じながらじつについた。

「ふうん。おもしろくないや。まあいこねど、帰つてくるまでに色々みてまわつたら？」

ぱたんとドアが閉じられてから真夜はまたつぶやいた。

「 相変わらずまあぐれね」

真夜は車椅子の端つゝかられりりと粒子になつ、まだどこかへ消えていった。

選んだ道の先にあるものとは何だらうか。（前書き）

おひやです。

選んだ道の先にあるものとは何だらうか。

エリュシオンとは離れた空間。どこにでも存在し、どこにも存在しない空間。

そんな空間と空間の主のお話。^{あるじ}

シャンデリアのオレンジの温かみのある光が照らす重厚なつくりの洋館のエントランスホール

に変化が現れた。

大きなシンメトリー細工がされている金メッキ細工のついた鏡の前に黒い霧が集まりました。

黒い霧は人の形を少しづつとり始め、数分後には紅い車椅子に座つた少女に変わった。

自らの手で車椅子を動かしながら横に長い屋敷の奥へと消えていった。

車椅子の少女が消えると鏡がぐにゃりと歪んで見え、鏡から人が現れた。

鏡の向こうから人が現れるとシャンデリアの蠟燭がひとつ消えた。

出てきた人がホールの赤いフカフカの絨毯を一步踏みしめると

風もないのに、灯火ともしびがゆらいで消えてしまった。

出てきた人も奥へと消えると、

そこには長い白いレースのついた赤いリボンに結び付けられていた銀の鈴が落ちていた。

今、そこには誰もおらず、鈴が落ちていることは誰も知らなかつた。

それが必要ならば何も問いましない

「ライ」

ひんやりとした空気が張り詰める切り出された青みがかかった灰色の石の地下牢獄に

名前を呼ぶ声が響いた。

しばらく名前を呼びながら車椅子を動かすと赤い車椅子に乗った黒いワンピースの少女、

真夜^{マヤ}は大広間の様な場所にいきついて、誰かを待っていた。

しばらくすると風のない閉ざされた空間のはずなのにわずかになまぬるい風が吹いてマヤの

向かい側に渦巻く。

やがて風が渦巻くのが終わるとほんやりとしていて体が透けて見える5、6歳ほどの

女の子がふわふわと宙に浮かびながらくすくすと狂気じみた笑い声を上げながら薄気味悪い

笑顔を振りまいていた。

「ライ。ウソツキだからしie（嘘）なんて安直じゃない」

マヤが幽霊の女の子、ライに聞いかけるとライはおかしいといいた
げござりて壁'。

ひとしきり笑い終わるといつ答えた。

「それがいいじゃない。私は嘘が好きなんだもの」

じある嘘つきのおはなし

それから、天井のシャンデリアを「ランプ」のようにゆすって遊んでいたライはやがて飽きてしまった

のか宙返りしながら着地してすぐにゆらりと消えていった。

はあ、とため息をついて問いかけたマヤは無駄足だったといふやうに理解して体を黒い粒子に変えて

地下室から消えていった。

黒い粒子が集まりだし、マヤが出現したのは質素で少し広めの自室。

そこには人がいた。正確には人外の存在だが。

部屋の主に断りもなくくつらいでいたのは、異世界の神に不本意になってしまったアウグストウス

と深緑の色の髪と目をした執事のような若い青年がのんびりと紅茶とお菓子を楽しんでいた。

そのことを気にせずマヤは一人に話しかけた。

「聞きたいことがあるの」

タ ちゅうひでいくつだけ？

「聞きたいことがあるの」

お茶会を楽しんでいる一人に近づいて問ひた。

「何？」「したの、マヤ」

紅茶を飲み終わってからアウグストウスはマヤのまつを振つ向いて
言つた。

「どうかいたしましたか？ 真夜さん」

深緑の髪の青年が給仕の手を止めてマヤのまつを向く。

「マキ、じつけんなさー

アウグストウスと共にいた真夜にマキと呼ばれた男性が真夜につれ
られてどこかに消えていった。

「あら、どうかいました。でもまあいいや」

のんびりと独り言をつぶやいてからアウグストウスはまた紅茶をす
すつた。

そしてひとりつぶやいた

あらかたアウグストウスが茶菓を食べ終えると先ほど退室していつた一人を待つことにした。

静寂が支配する空間で残り少ないカップに入った紅茶を見つめながら待つ。

あたりを時折見回しては変化がないか捜す。

部屋の片隅の大きな柱時計が一時間が経過したことを見てもまだ変化は現れなかつた。

「暇だなー・・・・・あ、いい事思いついた」

ぐいっと紅茶を一気に飲み干して立ち上がると、

部屋の北側の大きなクローゼットをスライドさせた。

すーーーーと音もなくレール付きキャスターのようにタンスが動くと赤茶色の扉があつた。

タンスの奥の隠し扉を開けて意気揚々とアウグストウスは扉の向こうへと消えていった。

扉が閉まる^レと同時にひとりでにタンスが元の位置に戻つた。

うたうたうの歌を形にして忘れぬつて、元氣に腰じて寝てこま

隠し扉の向いは夕日の差すほんのり薄暗いずっと奥まで続く書庫だった。

その書庫のなかをゆづくつとこらぬ埃を立てぬように歩きながらアウグストゥスは

書庫の棚の本の背表紙をみつめて一人づぶやく。

「けつこう本が増えてる。さすが夕日の無限書庫、所蔵量に制限なんかないね」

つぶやいてから少しうかと閲覧コーナーのか大きな四角いテーブルと

質素なイスが並べられていく。

テーブルの上のランプが読書には差し支えないほど光源を確保している。

気になつた適当に本を数冊選び取りイスに腰をおろして読み始める。壁の柱時計が時を刻む音とアウグストゥスが本のページをめくる音だけが書庫にこだまする。

やがてテーブルに並べたすべての本を読み終わる頃に

己以外の人の気配を感じ取ったアウグストウスはゆっくりと本を閉じながら振り向いた。

ひめわつの種をチヨ パヤ パーティングしたやつが おこしこよね。

「あ、マヤ。ひじり。元気?」

「ひじり。変わらないわ。何もかも、ね」

再会をよむこんだアウグストゥスとは反対に無表情で無遠想のマヤ。

「面白い物語ばかりでついついすと読んでたんだ。『めんね』

「別に、気にしてないわ。

それにこれらはライフワークだから。このためだけにこの館をつくり、書き続けた。

私自身の願い故にこの足になつても今は後悔していない

「ははは、マヤは強いねえ」

せつぱんと諦て切るマヤに驚嘆して力が抜けたようじりと椅子に座り込む。

「アナタのほうが強いのに」

「ボクはそれほど強くないわ。妻の桜花やせがせば強いやつなんて『まんとこる。

強さの意味は違つてもね」

窓からさす夕焼けの光が帯となつて二人を覆つ。

やがて二人の間に会話はなくなつた。

まひろと落ちた

「さて、ボクはもう行かなくちゃ。待っているから」

彼はよつよつと親父くわこセリフをつぶやきながら立ち上がり立上がつた。

「あらそり。ヒマになつたらまたこいつらに会う。待っているから」

無表情で声色も変化しない彼女はひらひらと右手をふった。

「わかった。ボクたち（人なりざる者）の時間は長いから、

再会までのときが刹那の一瞬に感じられる。また読みこぐるからそれまでたくさん書いてね

ひだまりのよつなあたたかさを持った微笑を真夜に向けて

存在も姿も揺らぐように消えていったアウグストウスは期待の言葉を残して

痕跡すらも残さなかつた。

「きみぐれで包み込むよつな優しさを持つたひとね

黄昏の光の中で独り言をつぶやいては彼女もまた黒い霧に姿を変えて消えた。

だれもいない図書館のよつた空間には赤い革の表紙の本だけが残つた。

そして幸せなんて決して無いもないと知った。

だれもいない壁の不安定なランプの光源だけで満たされた長い緋色の絨毯の廊下を一人歩く。

どこにでもいそうな平均的で典型的な日本人の少年、ペンネーム『アウグストウス』は

黒い学ランに着替えて浮かない顔で足取りも重かつた。

「遅くなっちゃった・・・妻と子供たちになんて言い訳をしようか

独り言が廊下に溶けて消えた。

ポケットから竜胆りんどうの彫刻が施された銀の懐中時計をとりだして時刻を確認した。

「完璧遅刻だ。3時間の大遅刻。どうあやまつ。オーソドックスに土下座？」

わざわざ独り言を玄関まで言い続けた。

ゆっくりと非力そうな彼は一メートルは軽く超える大きな扉を自らの手で開いて帰つていった。

「贅沢ね。待つ人がいるなんて」

いやいやながら帰るアウグストウスのその姿をどこかひやりました

うに

赤い車椅子から屋敷のあるじは見ていた。

扉が完全に閉まる直前に素直な感想をこぼして。

全部壊れちゃえぱいにね

——アウグストウス視点——

自分の管理する箱庭「樂園（Elysion）」を冠した世界へと魔法を使って帰還する。

遠距離瞬間移動の魔法による浮遊感に身を任せて行き先を思い浮かべる。

堂々と自分がいるじながら正面玄関のエントランスホールからこの思いをあくびにも出さず歩いて行こうが、

それともほどぼりが冷めるまでのんびり自分が築き上げた世界の一週旅行としゃれこもうか。

いや、こりは素直に自室で待っているであろう妻と子供たちに謝りに行こう。

怒つていてもいつかは許してくれるだろう。

きまぐれで、完璧な戦略の構築には天賦の才能を持っているけど色恋沙汰には疎い

1（恥ずかしながらこれは自分にも当てはまる）、

本当はとても優しい彼女に惚れ込んでしまったからには、

自身の役職の肩書き（世界の創造神）に恥じぬ働きをしよう。

強力な力を持つても「この手から」ぽれ落ちる砂の数は変わらない。

だからせめて、この手にすぐれる砂粒だけでいいから守り抜こう。

そう決意して右手を握りしめた。

誠心誠意心を込めて謝つて、それから笑顔で過ごせるようこうむらう。

みんなの、だれかの笑顔を。

せりりと流れの髪にそっとくちづけた。

結局やつぱり素直に謝りつつ考えて本当にシンプルな血室のドアを開けた。

「「」みんなさー」

「ねえ、コウ。通い妻のボクがひしゃぶりにこじに来たのに、いつたにどうこついとなの？」

入ってドアを後ろ手に閉めた直後に本能的な恐怖から部屋の主、

ひこては世界の管理者が土下座した。

フローリングに額をこすりつけながら最愛の人の笑つてはいるが、

目が笑つていらない最悪の状態を想像してせりに恐怖で震える。

そうこえは、彼女が自分のことを本名をもじつたあだ名の『コウ』と呼ぶときは

本音をぶつけたときか自分の言つことを聞いて欲しい時だと

いまさらながらアウグストウスは思い出した。

彼の首筋と頬に金属のような冷たい物が少しだけあたる。

「ひつ」

ちひりと見ると当たつたものは

彼女は普段から腰にさしてい

『昔からの最高の相棒』と豪語するオレンジ色の鞄の刀だった。

彼の手と背筋からひやりとする汗が滑り落ちた。

「桜花、本当にごめん。ボクが悪かった。

大好きな姉ちゃんがこの世界に転生するつてつえ（上層部）から聞かされて、

有頂天になつて舞い上がつた帰りにいろんなところフラフラしてた
から・・・その・・・」

彼の精一杯の事情説明を聞いて

彼女の普段は柔らかく高い声が低められて硬質な声に変わり、こう言つた。

「ふうん。で？」

そして左手で彼に当てていた刀をじかて白い手袋をした手を添えて鞄におさめる。

彼は最悪の事態を覚悟した。

愛がなければ見えない想い出は・・・

「ふうん・・・ま、いいや。どうせ仕事でしょ、飽きたから、次はどこに行こうかなあ？」

しばらく首をかしげてうぐを組んで考えた末に大きなマントを翻して窓際へと歩いた。

そして手にしていた刀を突如現れた黒い大きな穴に放り込んで窓を開けて、

サッシに手をかけて器用にサッシの上に飛び乗った。

「そんじゃ、またいつか」

飘々とした人を喰つたような調子で笑つて一度だけ振り返る。

たんつ、軽い音がして窓の外の口がすっかり落ちた暗い世界へ彼女は飛び立つ。

彼女が飛び立つた瞬間、息をするのも困難なほどの強風が部屋を渦巻いて

一人部屋に残された彼は立つことが難しくなつて座り込んでしまう。

数秒後には、どこにも彼女はいなくなつていた。

「あーああ。怒らせちゃったか・・・ま、いいや。そのうちまたふ

「うと来るや」

パンパンと、服のホコリをはらつて立ち上がる。

強風が吹いたにもかかわらず部屋はなぜかきれいなまま。

ふうー、とため息を付いてのびをしたら、

ひかえめで小さなノック音が彼の背後のドアからした後開かれた。

「おかーさん、入ってもいい？・・・ってアレ？おとーさん、おかーさんは？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3036m/>

テンプレ異世界物語を神の視点で見てみる。

2011年8月2日19時50分発行